石櫻新聞

第1面
各部の活躍

第2面
教育実習の先生から

平成10年9月5日発行
第103号
発行　岩手高等学校
盛岡市長田町
印刷　山口北州印刷㈱

各部とも・活躍・つづく

●野球への思いは負けない―野球部

野球の県大会で、本校は、七月十六日に県営野球場で、水沢工業高校と対戦した。全校生徒の見守る中、序盤は接戦で、一時リードを奪ったものの、大会間近にコンバートした内野の乱れなどもあって、4－10という結果になった。

さて、三年生の中岫雄亮君に、自身の野球生活を振り返ってもらった。

心の財産

僕が野球というスポーツに出会ったのは、小学二年生の五月です。何も知らずに父に連れて行かれたのは盛鉄グラウンドで、そこでは桜城スポーツ少年団が練習をしていました。初めてのキャッチ・ボールで、鼻にボールをあてて鼻血を出したことを、今でも昨日の事のように覚えています。

それから、はや十年、人生の半分以上が、日々特訓でした長いですね)。この十年間、何度も辞めようと思いましたが、いろいろな方々に励まされ、応援され、今の自分があると思います。あの勝った時の嬉しさや、負けた時の涙の出るような悔しさを味わえるのは、この九人でプレイする野球しかない、と思います。僕たち野球部は、負けてしまいましたが、僕たちの野球に対する愛情はどこにも負けないつもりです。

野球はいいですよ。この文章を読んでいる皆さん、子どもが生まれたら、野球をさせましょう。僕は当然やらせます。

一年米澤が県二位・県高校将棋大会

五月二十九日三十日、高校会館で第二十回県高校将棋大会が行なわれた。本校からは将棋部員十九名がA級個人戦、B級個人戦、団体戦に分かれて対局した。

個人戦はトーナメント戦で試合が行なわれた。三年の佐藤(真)と山下と平野と佐藤(孝)、二年の吉田と高橋、一年の川村と横手が二、三回戦に進出したが、勘違い、駒の置き間違いなど、ミスを連発し、まさかの全滅。来年は、一、二年が成長し、予選から決勝トーナメントに出場する人が現れることを期待したい。

団体戦はリーグ戦で熱い戦いが繰り広げられた。三年の大池、二年の吉田、一年米澤は盛一の星と戦い、この試合も両者互角で白熱したが、星の必死の攻めを防ぎきれず、米澤は惜しくも敗退した。しかし、個人A級決勝トーナメントの出場権を獲得し、翌日の大会に参加した米澤は県二位の成績をおさめた。

決勝戦は誰が勝っても池は押しつ押されつの戦いだった。あと一歩というところまで追い詰めたが、盛一の尾形が防ぎきり、惜しくも敗退。次鋒の二年吉田は盛一の馬場と対決した。中盤あたりまで両者、全く互角だったが、頭一つ出た馬場が攻めきり、吉田は惜しくも敗退。大将の一年米澤は盛一の星と戦い、この試合も両者互角で白熱したが、星の必死の攻めを防ぎきれず、米澤は惜しくも敗退した。

四国インターハイ場

テニス部

念願のインターハイで一勝
——ソフトテニス部

高知で行われたインターハイに出場した本校ソフト・テニス部は、八月五日に栃木県の那須拓陽高と対戦し一勝した。次に沖縄県の南部工高と対戦したが惜しくも敗れた。

以下は今大会に出場した駒井絢也君の寄稿である。

僕にとってインターハイは必ず出場したい大会でした。二年生の時もあと一歩で逆転負けしてしまい、三年となった最後の夏に、インターハイに出られた事は大きな事でした。

一回戦、4—1で勝ちました。二回戦、僕たちは、初め0—3とリードされてから、0—4で負けたくないと思い、ねばりにねばって3—3にしました。が、最後は、心の弱さを出してしまい、3—4で負けてしまいました。

インターハイは、技術ではなく、心と心の戦いだと思いました。どちらがどれだけ相手に、負けたくないか、勝ちたいか、で勝負が決まるような気が、試合を見ていても、プレーをしてみても、しました。

僕は、インターハイで、三年間の最後のプレーを、悔いを残さず終われたことを誇りに思います。

最後に今までお世話になった方々、本当にありがとうございました。

ソフトテニス部

高知の暑さは敵のよう
——テニス部

インター・ハイにおいて、本校のテニス部は、八月二日に鹿児島県の鹿児島商高と対戦し、残念ながら敗れた。

以下はインターハイに出場した村上淳君の寄稿である。

僕にとって最初で最後のインター・ハイが終わりました。

僕は、団体戦に出場せず、個人戦に出場しました。

個人戦の顔ぶれは、みんな、県予選で僕を倒してきた人達だし、岩手高校ということもあって、期待していました。

団体戦も、東北選手権で優勝していることもあり、シード権をもらっていました。

そういうことがあり、岩手高校は沢山の人達から期待され、注目されていました。

しかし、試合の内容はボロボロで、みんな、いつもの調子が出ずに、負けてしまいました。その時点で僕達は沢山の期待を裏切ることになってしまいました。

このような結果を招いてしまった原因には、高知のコートに立っているだけで、汗が出て、頭がボーッとして、テニスをするのが嫌になるほど気持ちが悪くなりました。地元の人はこれが当たり前かも知れないけど、東北のような涼しい所から来る人は、この暑さが敵のように感じたはずです。東北より南の人達は、このような暑さに負けない精神力を持っているから強いのではないか、と思いました。だから、僕達は、これからの練習で少しくらいでは弱音を吐かずに、もっと暑い地域がある、ということを頭にたたき込んで練習すべきだ、と思いました。

来年は岩手でインター・ハイがあるので、少しは有利だと思うけれど、もっともっと強い精神力が必要になってくると思います。今の後輩はそれが、きっと出来るはずです。是非がんばってほしいと思います。

山陰を見て撮って

写真部

運動部にインターハイがあるように、文化部には全国高校総合文化祭がある。

今年の、略称、全国高総文祭は鳥取県で行われた。

東北の者にとって鳥取県はあまり馴染み深い地域ではない。鳥取といって思い浮かぶのは鳥取砂丘くらいではないだろうか。

さて、その鳥取県で開かれた高総文祭に、本校からは、写真部三年の梅沢達也君、映画部三年の佐藤潤哉君・千代川哲也君と、顧問が参加した。

写真部門も、映画部が出場する放送部門も、会場は米子だった。米子は鳥取県の西端に位置し、隣りが島根県である。従って、有名な砂丘は離れた場所にあった。

以下、先に米子入りした写真部門の様子を紹介する。

八月六日の朝九時に盛岡駅を出て、夕方五時過ぎに米子駅に到着する。東北・東海道・山陽新幹線と乗り継ぎ、岡山駅で伯備線に乗り換える列車で八時間強の旅だった。到着し宿に荷を下ろして、米子市内を散策した。城跡は草深かったので奥へ進むのは止め、日本海を望む公園を巡り、海と結ぶ運河沿いに並ぶ土蔵群を見た。

七日は米子市美術館で開会式が行われ、写真展を観覧した。出品した梅澤君の作品だが、残念ながら全国展での上位入賞には至らなかった。ちなみに、岩手県からの出品で上位入賞はなかった。午後、顧問の思い出の地、鳥取県の島根県まで足を延ばすことになった。JRで松江、安来、などを通過し、出雲市駅まで行った。山から霧が昇っていて、まさに出雲という感じだった。駅からは一畑バスで、大鳥居を越え、大社前まで移動した。大国主命を祀る出雲大社はとても大きかった。帰りは、一畑電鉄という スイッチバックのある電車で、行きとは反対側の突道湖を見つつ、松江まで戻った。俄雨の中を堀沿いに歩いて、怪談で有名な小泉八雲記念館まで行き、武家屋敷を眺め、探すのに手こずったが松江城にも登った。この日はかなり歩き回った。

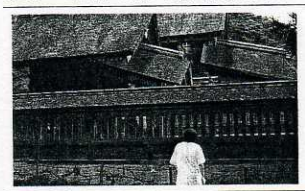
八日には、先ず、世界にその名が轟く写真家の植田正治氏の写真美術館を見学した。一部屋を丸ごとピン・ホール・カメラの暗箱にした実験室もあった。次に、美術館の外壁などを利用してのモデル撮影会が行われた。続いて、山陰の名峰、大山の風物の撮影であった。

夕方、雨が激しく降ってきたにも関わらず、顧問は鳥取県の突端境港へ行くと言い、バスで駅前まで行った。その境港には何があるのか、といえば、漫画家、水木しげるの故郷ということで「ゲゲゲの鬼太郎」「河童の三平」に登場するキャラクターのオブジェがずらりと通りにあるのだった。その数およそ八十。通りの店は鬼太郎グッズを販売していた。

九日には、植田氏の講演会があり、氏の写真人生を知ることが出来た。戦前の絵画的写真の時代を経て、戦中は写真が撮れなくなり、戦後は、土門拳が主張したありのままを撮るスナップ写真には組せず、「作り」にこだわってきた、という。

続いて表彰式となるのだが、途中で退室した。正午発の列車で帰るためだ。列車の長旅の末、夜八時に盛岡へ帰ってきたのだった。

めったに行けない場所へ行けて、いい経験になったと思う。



教育実習の先生から

中間考査の明けた六月から七月十日まで、教育実習の先生方をお迎えした。二、三週間の短い期間ではあったが、熱意あるご指導をして頂き、印象に残っている。その先生方からの感想である。

美術・有馬辰樹先生

学生という立場から教育実習ではあるが、先生という立場に初めてなってみて、やはり教師は大変な仕事だという事が分かりました。私は美術を教えたのですが、美術を通して学んで欲しい事が伝わったかどうか不安になったりしました。かと思うと、教えた事を素直にきいてくれる皆さんがいて嬉しかったり、と色々でした。こうして振り返ってみると、クラス全員が男子だった、というのが、実はやり易かったな、と思います。

理科・黒沢一秀先生

教育実習生として母校に来る事になり、初めの内は緊張と不安で一杯でした。しかし、先生方の良き指導のお陰で無事に教育実習を終える事が出来ました。毎日体験する事の全てが勉強で、二週間が短かった様に思えます。

毎日が失敗と反省の繰り返しでしたけど、全てが新鮮で、大変貴重な体験をさせていただきました。

先生方には色々とご迷惑をおかけしましたが、この体験を今後の自分の将来に役立てたい、と思います。本当に有難うございました。

美術・源間俊光先生

二週間、実習を終わってみて、やっと終わったな、というのが素直な感想である。始める前、正直言って、母校の岩手高校に来る事には、少々抵抗があった。理由として、やはり男子校であるという事が大部分を占めていた。が、実際、二、相手がみんな男だと、話し掛け易いし、自分も高校時代の気持ちが分かるからだと思います。男子校で暑苦しい、と思っていたけども、二週間いて、そんなに悪くない、と感じました。皆さんは違う気持ちかも知れないですけど、女子が居ないのは、先生をしていて少し楽でした。

二週間だけの実習でしたが、色々と先生方にもご面倒をかけたりしましたが、私としては、大変勉強になりました。どうも有難うございました。

地歴・菅原究先生

感謝を申し上げたいと思う。再び岩手高校に戻り、実習生として過ごした二週間は、教員を目指す自分にとって代えがたい経験になったと思う。頭で考えている事と実際に経験、実感した事では、その質も、以後に於ける行動の可能性の拡がりも違う。実際に経験、三日やっていくにつれて、改めて男子校の良さ（？）が分かってきた。それを分からせてくれた生徒の皆さんを初め、良き指導者であった各先生方、また、私のわがままを聞いてくれたり、授業の協力をしてくれた実習生の皆さんのお陰で、なんとか、二週間、実習を終える事が出来たと思っている。最後に、迷惑ばかりかけてしまった私に、適切なアドバイスや、教師という職業の難しさ・楽しさなどさまざまな事を教えてくれた各先生方に感謝して、終わりにする。

保体・田中舘光先生

自分の受け持ちは保健体育とあって、この実習生よりも一週間長い、三週間の実習期間でした。自分もこの学校の卒業生であったので、生徒のみんなの感じがどんなものか想像していました。最初、見たときは、暗そうな、悪そうな生徒達だな、と少し心配でした。しかし、みんなと一緒に勉強しているうちに、みんながどんな子らか分かってきて、とても面白い子達だな、と思いました。

特に、受け持ちの二年D組のみんなには、とてもよくしてもらい、とても楽しい毎日でした。

たくさんの勉強をして自分も人間としてのレベルが上がったような気がします。

正直言って、男子校よりも女子校に行きたかった、というのが、本音の考えでしたが、終えてみて、君たちと勉強できてよかった、というのが今の気持ちです。生徒のみんな、先生方、実感した二週間の実習経験は、以後の自己実現を可能とする糧となるだろう。そのような意味で様々な経験をご迷惑をおかけしましたが、とても楽しく、勉強になった三週間でした。本当にどうも有難うございます。

公民・吉田央先生

今回は教育実習でお世話になりました。はつきり言うと、教材研究・知識不足で、大変、生徒の皆さんには迷惑をかけた、と感じています。

しかし、私は色々な事を学ぶ事が出来ました。授業の進め方、板書の仕方、声の出し方、その他いろいろ為になることだらけでした。

岩手高校の在校生に言いたい事は、色々な先生に言われる事、注意された事は、高校を卒業して、必ずどこかで役に立つことなので、（今はうるさいと思って聞かないと思いますが）その事を頭に入れておくといいかもしれません。

本当に有難うございました。

編集後記

本校の文化祭にあわせて新聞を刊行した。この新聞が文化の一端を担うことになれば、と思う。前の号を刊行した後、夏休みに入り、原稿が集められなくなった。そのため、四面の予定が半分の二面になってしまった。予告のうち、原稿の集まらなかった分は、次号へ回したい。原稿を書いていない出版委員の活躍を期待する。

将棋部の大会報告を顧問の藤原先生からいただいた、山形県天童市で行われた、第19回全国中学生選抜将棋大会と、福岡市で行われた高校将棋日本一を決める、第11回全国高校将棋竜王戦の報告は、次号に掲載する。

編集委員
西國　礼士（3A）
佐藤　真一（3A）
白木　晃久（3C）
木内　浩文（3E）
戸舘　裕二（2A）
山内　剛（2A）
佐々木鉄生（1B）
児玉　大樹（1C）
田村　孝志（1C）
刈屋　智広（1D）
武藤　諭（1D）

編集協力者
都築　明（3C）
中嶋　雄亮（3C）
村上　淳（3C）
駒井　絢也（3E）

顧問
外舘　克裕
和田　健一郎
五日市悌